世界動物文学

21

さよなら！ ピッパ
金色のアザラシ
湖の女王 マ・キイ

I14
J3-21

903.3

I14
J3-21

110615
日文 701707698

世界動物文学全集

21

上海外国語学院図書館
埼玉県立熊谷図書館
消印
埼玉県立図書館
79973
蔵書

講談社

世界動物文学全集21　さよなら！　ピッパ
金色のアザラシ
湖の女王　マ・キイ

昭和55年7月18日第1刷

著者　ジョイ・アダムソン
ジェームズ・V・マーシャル
デイビッド・V・レディック

訳者　藤原英司
日本リーダーズダイジェスト社編集部
千種　堅

発行者　野間省一

発行所　株式会社講談社

東京都文京区音羽2-12-21　郵便番号112
電話東京（03）945-1111（大代表）振替東京8-3930

印刷所　豊国印刷株式会社

製本所　藤沢製本株式会社

定価　1780円

© 藤原英司　日本リーダーズダイジェスト社編集部　千種堅　1980年
printed in Japan

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします

0397-405216-2253（0）　（文2）

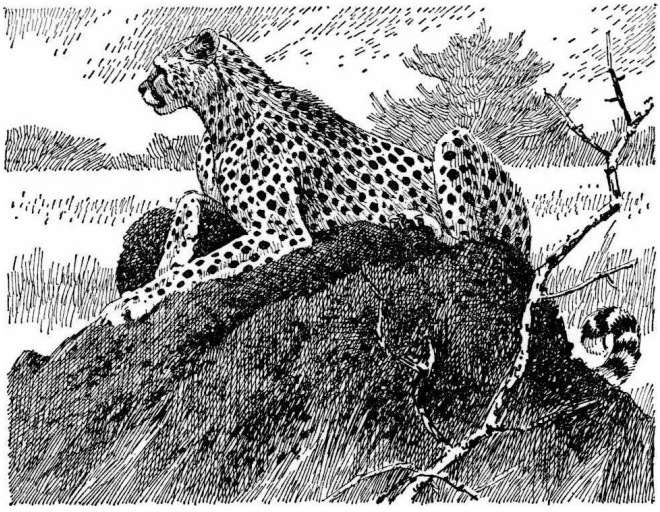
目次

さよなら！　ピッパ　5
金色のアザラシ　193
湖の女王　マ・キイ　233
解説・藤原英司　383

装幀　蟹江征治

イラスト　田中豊美

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.



さよなら！　ピッパ

ジョイ・アダムソン
藤原　英司　訳

PIPPA'S CHALLENGE

by

Joy Adamson

Copyright © 1972 by the Trustees
of the Elsa Wild Animal Appeal and
Kleinwort Benson (Channel Islands) Ltd.
Japanese translation rights arranged with
William Collins Sons & Co., Ltd., London
through Tuttle-Mori Agency, Inc., Tokyo

まえがき

わたしは『いとしのピッパ』を発行したあと、たびたび、つぎのような質問をうけた。つまり、チーターの行動からわたしが得たもっとも重要と思われる洞察は、なんだったと思うかということである。わたしは四年半にわたって、東アフリカのメル国立公園（元のメル野獣保護区）でピッパとともに暮らした。その間にわたしが学んだすべてのことは、手短に言えば、二つに大別できると思う。すなわち、産児制限とテレパシー（精神感応、または以心伝心）である。

わたしたちはチーターの妊娠期間が百日から百三日であることと、二、三週間ごとにかれらが発情すること（あるいは発情期を迎えること）を知っている（この発情期の正確な期間については、わたしはまだつきとめられないでいる）。

わたしはピッパについて、つぎのようなことを知った。つまりピッパは自分の子どもたちを育てている間、雄とつがわず、子どもたちが彼女の庇護から独立するまで雄と交わるのを待つということである。そして子どもたちの独立は、生後約十五ヵ月のころにおこる。この十五ヵ月の間、わたしはピッパ親子からそう遠くないところで雄チーターの足跡を二、三回見て、そのあとを追ったことがあった。しかし、その期間に、ピッパが雄と連れだっているところは、一度も見たことがなかった。

子どもたちは生後五週間で肉を食べだした。しかし子どもたちは生後十一週と五日になるまで乳を飲みつづけた——少なくとも、ビッグボーイが、その段階でまだ乳を飲んでいるのを見た。だが、ピッパは子どもたちが生後二十四週間と五日になった時でも、まだ少し乳が出た。

悲しいことに、ピッパは四回の出産のうち、二回（最初の子と三番目の子）、子どもたちを肉食獣に奪われた。最初の子の時は、出産後六週間以内に奪われ、三番目の子は、生後十三週間の時で、その時ピッパはまだ出産のあと体がほとんど回復していなかったのに雄とつがい、一週間以内に妊娠した。最初の子をなくした時には、そのあと三週間以内につがった。このことは、つぎのことを示している。つまり、二度とも、ピッパは、不運な子どもたちが死に、もはや自分を必要としていないことを知ったにちがいないということである。そしてピッパがこれを知ったことが、ピッパの〝心理的障壁〟をとり払ったように思われる。この〝心理的障壁〟とは、この場合、ピッパが子どもを奪わ

れなければ、育児に専念する間、彼女の性欲をいつも消去してしまうもののことである。このことはまた、チーターがつぎのような動物であることを証明している。つまり、チーターの雌は、たとえ産後の状態からほとんど回復していなくて、まだじゅうぶんに乳汁分泌期にあっても、雄の存在によって刺激され、発情できる〝誘導排卵性の動物〟だということである。チーターの雌とライオンの雌は、ともに同じ行動様式を示すが、この二つの動物における心理と肉体器官（特に生殖器官）との協調関係について、わたしたちがもっと多くのことを知ることができれば、人間における破滅的な人口問題を制御するのに、大きな貢献をなしうるかもしれない。なぜかというと、すべての哺乳類は、基本的に同じ生殖器官をもっているからである。

ピッパが子どもを失ったあと、どうやってすぐに排卵できるのかということを、わたしは知りたいと思った。だが、それだけでなく、どこへ行けば雄が見つかるかということをピッパがどうやって知るのかについても、わたしは知りたいと思った。『いとしのピッパ』の中で、わたしは、つぎのことをすでに書いておいた。つまり、ピッパは子どもたちが獲物を殺せることがわかると、いち早く雄とつがうということである（子どもたちが獲物を殺せるようになるのは、生後十四ヵ月の時だった。もっともこの年では、かれらはまだ母親の助力が必要で、じゅうぶん練習をするのに、さらに二、三週間、母親に援助してもらわなくてはならなかった）。

ピッパは雄を見つけに出かける間、自分の二番目の子どもウィッティとタッーに、わたしのキャンプからおよそ三キロ以内にとどまっているよう〝命令〟してから出かけていくように思われた。そしてその際、ピッパは自分が留守の間、わたしが子どもたちに餌を与えるということを、たしかに知っているようだった。ウィッティとタッーは、母親が留守の間、ほとんど動かなかった。わたしは毎日、子どもたちのところへ出かけ、子どもたちは、わたしの餌をうけとった。だが、かれらは唸り声をあげた。その声は、かれらが餌をもらうから、わたしのことをがまんしているのだということを、じつにはっきりと示すものだった。いっぽう、わたしはピッパの足跡を追った。その足跡は、明らかにピッパが雄を見つけたということを示すところまで、約十三キロにわたって、ほとんどまっすぐに走り去っていた。

ピッパは一週間後に、ふたたびキャンプに姿を現わした。そしてピッパはわたしがさしだした餌を拒み、大急ぎで自分を待っている子どもたちのところへ出かけていった。わたしは肉を持って、ピッパのあとをつけた。ピッパは子どもたちといっしょになったあと、初めて肉を食べた。それもあまりがつがつ食べるので、わたしはピッパがひどくお腹をすかせていたことがわかった。

ピッパの二番目の子ムビリは、ピッパが留守の間に、十

七日間、どこかへ行ってしまった。わたしはとても心配して、毎日ムビリを捜したが、ピッパは気にしていないように思われた。それはまるでピッパが、ムビリの身に危険はないことを知っているようだった。そしてじっさい、ムビリは完全な状態で帰ってきた。ところが、足の傷をなおしてやるため、わたしたちがピッパの二番目の家族からウィッティとデューメを連れ去った時は、ピッパは何日間もいっしょうけんめい二匹を捜し、ひどく気分を滅入らせていた。

ピッパは最後に子どもたちとの絆を断つ前に、子どもたちを将来の猟場へ連れていった。そこはおたがいに隣りあった土地で、じゅうぶんに食料がまかなえるだけの広さのところだった。そして子どもたちは、なにかはっきりしない掟によって、おのおのの縄ばりの境のところではおたがいにたびたび会いはするものの、おたがいの縄ばりをおかしたり、ピッパのあとについてキャンプへ帰ってきたりすることは、一度もなかった。これは初めからそうだったし、あとになっても同じだった。これはチーターの雌が、雄よりも厳格な縄ばり本能をもっていることを示しているように思われる。チーターが、雌雄ともに〝臭いの標識〟をつけて侵入者に警告を与え、退けようとする時でも、雄は雌よりずっと無神経に動きまわる。

以上のことは、ピッパが自分の子どもとばかりでなく、自分の相手の雄とも意志を通じあえたということを暗示するのかもしれない。その際ピッパと相手は、音も臭いもとどかぬほど遠く離れていた。これに対する唯一の解答は、ピッパがテレパシーによって交信したということのように思われる。さらに『いとしのピッパ』の中に書いたことだが、グイッの〝心〟は、彼をピッパの家族のところへ導いた――そしてピッパは、わたしたちに会うために、自分の通った道を逆もどりすることによって、とくにゲーム・スカウト（野獣保護のための巡察員）のグイッの〝心〟に反応した。このことは、グイッのように終生自然に深くかかわって生活している人間は、文明化された人びとより、はるかに強く、思考伝達の力を温存していることを示すもののように思われる。そしてこれは、わたしにつぎのような確信を深めさせる。つまり、人間はもともと野生の動物が保有していると思われるのと同程度のテレパシーの力を持っていたが、人間が会話能力を発達させ、またのちにはラジオや印刷物、電信のような機械的交信手段を発達させることによって、思考伝達に役立つ内分泌腺が萎縮してしまったということである。たしかに今日では、ごくわずかの人が、どちらかというとあてにできないやりかたで、テレパシーの力に依存できるにすぎない。わたしは過去三十年間、ケニアの自然に近く接して生きてきた。その結果、わたしは動物たちに対して、鋭い超感覚的知覚を発達させた。たとえば、エルザとデューメが死んだ時、いずれもかれらがわたしからずっと離れていたにもかかわらず、わた

しはその死を知った。だが、このわたしの超感覚的知覚は、わたしと同類のもの――つまり人間との間では、ずっと弱くしか働かない。

もうひとつ、これも『いとしのピッパ』の中に書いておいたことだが、テレパシーではないかと思われるできごとがある。それはジョージの助手がピッパのために新鮮な肉をもっていった時、ピッパがそれを知っていたように思われることである。わたしたちはだれ一人、その助手が獲物をとりに出かけたことを知らなかった。だがピッパは、助手が午後おそく彼女のために獲物の死骸をもって帰ってくるまで、道の上に何時間も人待ち顔で座りこんでいたのだった。

エルザも、わたしがエルザの姉妹たちをオランダへ飛行機で送るため、ナイロビへ連れていった時、同じようにふるまった。その時、夫のジョージが三百二十キロ離れた家にエルザといっしょに残った。そして、わたしがいつ帰るかは、夫にもエルザにもわかっていなかった。だがエルザは、わたしが帰る日を〝知った〟。そしてエルザは家へはいる道のところで、わたしが帰ってくる方向を見つめながら、終日わたしを待っていたのだった。

『エルザ』シリーズの本の中で、わたしは、やはりテレパシーによってのみ説明できる他のいくつかの事例を書いておいた。たとえば、わたしたちがエルザのキャンプにエルザを訪ねていこうときめた時、エルザはそれを知った。そしてわたしたちが二百八十キロのドライブをおえてキャンプへついてみると、エルザはいつも、わたしたちを待っていた。あとでわたしたちがエルザの新しい足跡を追ってみると、わたしたちは必ず、エルザがわたしたちに会うためにずいぶん遠くからやってきていたことを知るのだった。また、エルザは、その土地の前の所有者の〝恐ろしい雌ライオン〟から自分の縄ばりを守るために危険な戦いをする間、子どもたちをわたしたちの手元に残し、動かないでいさせたことがよくあった。子どもたちがいなくなった時、わたしは心配したが、エルザは子どもたちが安全だということを、知っているように思われた。

エルザの場合もピッパの場合も、そのテレパシーの感覚は、かれらと子どもたちの間、あるいはかれらとわたしの間に関する限り、あてにできるもののように思われた。

医学的研究によれば、松果腺と脳下垂体、それに超視床(hyperthalamus)が性的発達にかかわりをもつことを示唆しており、これらの器官が、思考伝達にもまたかかわっているかもしれないということを暗示している。だが、今日までのところ、わたしたちは、これらの器官の機能や協調関係について、わずかしか知っていない。もし、わたしたちがこれらの野生のネコ族の行動から、思考伝達についてさらに多くのことを学び、そしてのちにわたしたちがこれらの器官の機能を分析することができたならば、わたしたちはじつに重要なことをなにか学べるかもしれない。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

そしてそのことは、われわれが生き残りたいなら、どうしても理解する必要のある生命のいくつかの面に関して、よりよく理解する方向へと、われわれを導くであろう。わたしたちの知性の過度の特殊化は、わたしたちのまわりの他のすべての生物から、危険なまでにわたしたちをへだててしまった。そしてわたしたちは今一度、〝自然のバランス〟の中で建設的な立場をはたすようになる方法を見つけないかぎり、人間は、過度に特殊化して環境からはみだしてしまった他の生物の種のように、消え去るかもしれない。いや、そればかりでなく、わたしたちは、わたしたちとともに生きているあらゆるものをまきぞえにするかもしれないのだ。わたしたちはもっとも進化したものであり、またすべての動物より知的に進んだものではあるが、わたしたちはまた疑いもなく、もっとも破壊的なものである。

一九六八年九月八日のサバンナ・モーニング・ニュースに『脳は人間の敵か？』という記事が出たが、その中で、ワシントンUPI通信社の主筆ジョゼフ・J・マイラーは、つぎのように書いている。

「人間の脳は、人類のもっとも悪質な敵かもしれないという〝驚くべき皮肉な〟考えが、オックスフォード大学の動物学科で動物行動学の教授をしているN・ティンバーゲン博士によって、提唱されている。

ティンバーゲンが指摘するところ*によれば、人間は自分と同一の種のメンバーに対して大量殺害を行なう唯一の動物である。

教授の書いているところによれば、人間はそのすばらしい脳のゆえに、遺伝的に備えていたものよりはるかに早く文化的に進化してしまった。遺伝的には、人間は南フランスの洞窟に絵を描いた先史時代人と、そうひどく変わっているわけではない。『しかし、文化的には、われわれはもとの面影がわからないほどに変わってしまった。そして今も、いよいよ増大するテンポで変わりつつある』。人間の脳は、『生命の歴史に先例がないくらい、われわれの環境を支配』することを、人間に達成せしめた。そして脳は人間に大地の〝収奪〟を可能ならしめ、空気や水、土壌を汚染させ、全人類を飢餓による死の脅威にさらすほどの人口爆発をもたらし、また文明の成果を壊滅させうる大量破壊のいろいろな長距離兵器をつくりださせた。

人間の脳は、明らかに、ジキルとハイド的器官の一種である。ティンバーゲンは、技術専門の週刊誌『サイエンス』の中で、この問題を論じて、つぎのように書いている。つまり、脳の一部には、人間にとって理性的な生活を発達させうる部分があるというのだ。だが人間の脳には、もうひとつべつの部分がある。それは人間を動物的遺産ともいうべき〝本能〟に縛りつけ、また人間が自分の環境をすごい勢いで変えたり、戦争あるいは平和のために、戦具をす早く改変したりするのと同じくらい早く自分の行動を

変える能力を制限する。ティンバーゲンによれば、『われわれは、われわれ自身にも、まだ知られていない』。われわれは自分たちの脳の機能のさまざまな因果関係についての理解を欠いている。

ティンバーゲンは、つぎのように信じている。すなわち『われわれの行動のコントロールを行なえるような、行動についての科学的知識が、今日人類が直面しているもっとも緊急の課題であるというのは、うなずけることである。われわれの種ばかりでなく、なお悪いことに、地球上のすべての生命の生存そのものを危険におとしいれはじめているのは、われわれの行動の結果なのだ……進化によってつくりだされたもっともすばらしい生命を守る装置ともいうべき人間の脳は、われわれの種に、外側の世界をみごとに支配することを可能ならしめた。その支配があまりに成功をおさめたので、脳は突然、それに気づいて、びっくりし、困惑した。これはいうなれば、われわれの大脳皮質と脳幹（われわれの〝理性〟と〝本能〟）が争っているとも言いうる。この二つは、いっしょになって新しい社会環境をつくりだし、その中でこの二つのものは、われわれの生存を保障するよりは、むしろ、反対のことをしようとしている』。『この敵を理解』することが科学の仕事であり、その試みのひとつの方法が、動物の行動を研究することである。この研究は、攻撃的な行為をどうやって除去するかということを示してはくれないかもしれない。しかし、『その攻撃的な行為から毒牙をとり去る』いくつかの道筋を明らかにしてくれるかもしれない。人間だけが抑制されざる殺し屋なのだ」。

ピッパが野生のチーターの行動について多くのことを学ぶユニークな機会を提供してくれたので、国立公園当局は、ピッパの四番目の子が独立するまで、さらに十八ヵ月間研究を続行することを、わたしに認めてくれた。これによって、わたしは四番目の子の発達をピッパの以前の子たちとくらべることができるであろうし、また、今までにわたしが学んだものが、チーターの行動の標準かどうかをはっきりさせることができる。それだけではない。もしピッパが四番目の子たちの独立しないうちに、万一、彼女の以前の子どもたちに会った時、その相手の子どもが一頭だけの時、あるいは子どもが自分の子を連れている場合に、どういうことがおこるか。それをはっきりさせられるという望みももてるかもしれない。最後にわたしは、つぎのようなところを見る機会も得られるかもしれない。つまり、ピッパが増大する家族のために縄ばりの権利をどうやってきめるかということと、かれらが自分たちのつがう相手をどうやってえらぶかということである。野生のチーターがつがうところを見た者は今まで誰もいないし、チーターがいつ思春期を迎えるのか知っている者も、だれもいないのである。

*『動物と人間における戦争と平和について』N・ティンバーゲン――『サイエンス』一六〇巻一六〇ページ、一四一――一四一八ページ。一九六八年六月二十八日。著作権者アメリカ科学振興協会。

1　四番目の子どもたち

ピッパの巧みなトリック

今やピッパには四度目の出産の時が近づいていた。そしてわたしはこのところずっと、気をもみながら、ピッパの動きを見守ってきていた。今まで四日間、ピッパはどこかへ行ったままだった。だからピッパが歩いてキャンプへはいってくるのを見た時、わたしは、じつにうれしかった。一九六八年七月十三日のお茶の時間のことである。ピッパは近くの平原からやってきた。その平原は、ピッパが前の子を産んだところで、不幸な子どもたちは生後十三日目になった時、その平原でハイエナに殺されたのだった。その地域の植物相は、その後、生い茂る藪になり、ピッパぐらいの大きさの動物たちにとっては、哺育に適した場所というより、罠といったほうがいいものになっていた。したがってわたしは、過去数週間にわたって、ピッパがたびたびその場所へ出かけていったのを見て驚いていた。そして今度もピッパは餌をたっぷり食べたあと、すぐにふたたびその地域へむかったので、驚いた。

ロカルとわたしは、八百メートルほどピッパのあとについていった。八百メートルぐらい進んだところで、ピッパは腰をおろして、そのまま動かなくなった。わたしがピッパを軽くたたき、おっぱいでふくらんだ乳首にさわっている間、ピッパはあお向けにころがった。その時、わたしはす早い足どりでわたしたちのほうへ近づいてくる四頭のゾウの姿を認めた。わたしたちに残されていた脱出の方法は、ただ走ることいがい、なにもなかった。わたしは、ちらちらとうしろを振りかえりながら走った。そしてゾウたちの巨体が着実にピッパのほうへ迫っていくのが目にはいった。ピッパはほかの時には何回もそうだったが、今度もゾウたちを無視した。ほかの時ならともかく、今日は、わたしもとまどった。なぜかというと、ピッパの体のようすでは、今から四十八時間以内に出産しそうだったからである。

わたしたちはそのゾウたちが、ここ五日間、キャンプのまわりをうろつくのを見ていた。そしてわたしたちはかれらを追い払おうといろいろやってみた。しかしゾウたちは、わたしたちの小屋の近くに生えている二、三本の木に固執して、それらの木の葉を食べつづけた。それはまるでこの大きな公園の中で、かれらを満足させるものは、そこに生えている木だけだとでもいうようだった。

翌日、その場所にピッパの痕跡はなかった。そしてピッ

パは九日間、ゆくえをくらました。これはピッパが新しく生まれた子どもをわたしたちから隠していた期間としては、今までのうちで一番長いものだった。わたしたちは最後にピッパを見た平原一帯を捜してみた。しかし足跡も最近の糞も、ピッパがどこにいるのかという手がかりを与えてはくれなかった。それから、二十三日に、わたしは突然、ピッパがキャンプのうしろの高い土地の上に立っているのを見た。そこはわたしがランドローバー（ジープ型の車）をとめておいたところだった。ピッパはじつに長い間、周囲をぐるっと見まわしていた。ピッパがそのように疑い深くなっているのを見て、わたしはうれしかった。ピッパは若いころ、ナイロビのレストランに、たびたび客となって出かけたことがあった。だが今では東アフリカのアンボセリ国立公園やナイロビ国立公園にいるチーターよりずっと野生動物らしくふるまっていた。アンボセリやナイロビ国立公園にいるチーターは、すっかり観光客ずれしていて、ひんぱんに客の車の上にとびのり、客にさわられるのさえがまんするようになっている。ピッパにはそういうところがない。そのためにわたしは淋しい思いをしてきた。しかしそのことで文句をいうことはできなかった。ピッパがそのようにならなかったのは、ピッパを野性へもどす作業のそもそもの初めから、わたしが観光客をピッパから遠ざけてきた結果なのだ。だから、今ピッパが、わたしたちを悩ますものがないことを確かめている姿を見ることで、わたしは満足しなければならないし、またそれ以上のものを求めることはできなかった。

ピッパはあたりに危険がないことを確かめた上で、初めてわたしたちの近くへ肉をもらいにやってきた。それから、ピッパがつがつと肉をのみこむようにして食べるのを見て、わたしは初めてピッパがひどくお腹をすかせていたのだということを知った。また、ピッパがずいぶんやせたことにも気づいた。ピッパは食事をおえると、すぐに公園本部のあるレパッド・ロックへ通じる道についている自分の足跡をたどりだした。それはピッパが育児場所にえらぶだろうとわたしが見当をつけていた平原を、ずっと迂回していくコースだった。

日中でとても暑かった。だがピッパは三キロほど早く歩いた。それから曲がり、藪をぬけて五百メートルほどムリカ河の方向へ進んだ。ピッパは注意ぶかくあたりをかぎまわったあとで、わたしとロカルをメリフェラの藪へ連れていった。メリフェラというのは〝ちょっと待て（ウェイト・ア・ビット）〟アカシアといわれるイバラの一種で、ピッパが今までいつも出産に使ってきた植物の茂みだった。わたしはその藪の中に隠されている四匹の子を見た。二匹は目があいていて、ほかの二匹より大きかった。今までの三度の出産では、ピッパの子どもたちは十日から十一日の間に目が開いた。それから考えると、今度の子どもたちは生後九日にまちがいなかった。したがって、その子たちが生まれたのは七月十五日と

いうことである。

子どもたちはひどくぐらぐらした足で、ピッパの乳首のところへ這っていった。そうやって這うむくむくした小さな子どもたちを見て、わたしはピッパが出産の場所について、またもやみごとにわたしたちをあざむいたことを知った。そしてそのあざむきかたを考えて、ほほえまずにはいられなかった。ピッパはキャンプから八百メートルほどの平原を出産場所にえらぶかのように、わたしたちに信じこませていたのだ。じっさい十三日には、ピッパは、わたしたちがピッパとゾウを残して去るとすぐに、ここまで歩いてきたにちがいない。ここでは草は低く、小さい子どもを育てるには理想的な状態だった。あたりにはイバラの茂みが散在し、茂みと茂みの間には、ピッパが危険を見張るのにつごうのいい十分開けた場所があった。バソロンジ河もムリカ河も、歩いて十五分以内にあり、育児場所は道からはうまく隠されていた。しかしピッパは通りすぎる車やライオンたちの物音を聞くことができた。ライオンたちは道路をよく主な通路として使ったが、近づいてくる時には、いつも、ワッフィングと呼ばれる警報の声をさかんにあげながらやってきた。

わたしがピッパと子どもたちを見ていると、ピッパは子どもたちに一番よく乳を与えられるように、たえず体を動かして位置を変えた。そして子どもたちは顔をピッパの柔らかい腹に押しつけて、乳の出そうな乳首をみんな吸った。

わたしは気がすすまなかったが、この平和な情景をあとにして、キャンプへ帰った。

風向きに気をくばる母親の知恵

ピッパは今では、新しく生まれた子をロカルとわたしに預けてもだいじょうぶだということを知っていた。そしてその日の午後遅く、わたしたちがもう一度ピッパを訪ねていった時、ピッパはぜんぜん動揺せず、わたしたちがそこにとどまっていたわずかの間、子どもたちに乳を与えつづけた。

体の大きさだけから判断すると、四匹の子のうち二匹が雄だった。しかし、わたしはもう一匹の股の三角の位置に、やがて雄の性器になるレンズ豆ぐらいの皮質のものを認め、じっさいには雄が三匹なのだという結論を出した。もしこれが正しいとすると、ピッパは二度目の出産の時と、良い均衡を得たことになる。二度目の子は雌三匹に雄一匹で、今度はその逆の性比なのだ。

ピッパの前の子の時、デューメが生後やっと五ヵ月になった時に死んだので、前の子たちの雌と雄の関係を観察することができなかった。そこでわたしは、今度はピッパがわたしの助けによって、この四番目の子どもたちを、もっとうまく育ててほしいと、願った。

今までの悲しい体験から、わたしはチーターの子の骨が

弱く、よちよち歩きの子どもたちが足を傷つけやすいことを知っていた。そこでわたしは子どもたちが肉をたべだしたらすぐ、子どもたちの食べ物にビタミンを加えてやることにした。そうすることによって、骨を折るような事故を防ぐことにした。わたしが無知だったため、以前の子どもたちにそのような補足物を与えるのが遅すぎたのだ。わたしはすでにピッパの妊娠中、ピッパに与える食物に、毎日十五ミリグラムのカルシウム乳酸塩を加えることによって、ピッパを助けてやることを試みてきていた。そして、これは、ピッパが子どもたちを乳離れさせるまでつづけるつもりだった。

あくる朝、わたしは遠くからピッパに呼びかけて、わたしたちが到着したことを知らせた。ピッパは産室の藪から出て、わたしたちがピッパに餌を与える〝木陰の木〟のところへ、百メートルほど歩いていった。ピッパはひどくのどをかわかしていて、いくら飲んでもたりなかった。しかしピッパは肉にはほとんど口をつけなかった。それからわたしは、ピッパの陰門に、まだ血がかたまってついているのに気づいた。それでわたしは、ピッパに食欲がないのは、出産のいたでからまだ立ちなおっていないためなのだということがわかった。ピッパは今までのお産のあとも、同じようにふるまったので、これは正常であり、心配することではないように思われた。ピッパはすぐに空気の臭いをかいだ。そしてピッパは三百メートルほど風上へ迂回して、わたしを子どもたちのところへ連れていった。子どもたちは、ねむそうに顔をあげ、母親が一匹ずつかわるがわるなめて身をおちつけると、すぐに乳首をさがしだした。わたしたちはすぐにその場を去った。しかし午後に、ほんのちょっとピッパのところへ出かけた。ひどくのどをかわかしていたピッパに、水をもっと持っていってやったのだ。明らかにピッパは子どもたちだけを残して河へ水を飲みに行くという危険なことができないでいたのだった。

つぎの日までに、子どもたちはみんな目が開いていた。そしてわたしのほうを見てあいまいに目をしばたたき、鼻にしわをよせて、つばを吐いた。野生のチーターの子は、自分の種族でない生物がいることを感知して、それが危険かもしれないということがわかると、こういう反応をする。その反応は、わたしにはなじみのものだったが、そのことでおもしろいと思うのは、その子たちは今までに危険な経験をほとんどしていないということである。わたしがもうひとつおもしろいと思ったのは、ピッパが、気のいい年よりの召使スタンレーを、今は信用しなくなったことだった。そして、スタンレーが見えるところにいるかぎり、ピッパは与えられた食べ物に近づかなかった。しかし、いつもならピッパは、最初にわたしのところへきて時間をむだにするようなことはしないで、肉のはいった籠を持っているスタンレーのところへ、まっすぐに行くのだった。わ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.